

特別連載寄稿「健康、心、薬」第十八弾

●千葉大学名誉教授、薬学博士 佐藤 哲男氏 寄稿

▼第19話 名医の一言は値千金

私はかつて「不安神経症」だと思ったことがありました。そこで友人の神経内科医に検査してもらったら「正常だよ」とのこと。専門家が言うので間違いないだろうが、何となく納得できない。それが不安症だといわれればそれまでだ。私にとっての大敵は閉所と暗闇です。先日脳のMRI検査を受けました。初めての経験です。これといった自覚症状もなかったのですが、私の周囲で脳梗塞を患った友人が増えると何となくこちらも不安になります。

予約の日がやってきました。この検査を受けた人はご存知でしょうが、鉄のかたまりを管状にくりぬいた様な機械の中に頭部を入れて撮影する。ストレッチャーの台の上に寝かされた。「検査を始めます」の声に反射的に眼をつむる。身体がしだいに機械の中に吸い込まれて行く。理屈はよくわからないが、強力な磁場を発生するのですごい騒音である。30分程して「検査が終わりました」の声で目を開けた途端、鼻先五センチほどのところに円筒の天井があった。狭い空間の中に頭部を入れて撮影したらしい。閉所恐怖症の私にとっては最も恐ろしい場面である。もし、検査中に目をあけて天が目の前に迫って来たら、恐らく動悸と息苦しきで撮影が続けられなかっただろう。医師の診断では、「脳の梗塞も萎縮もみられない」とのこと。この分だと当分は余命を楽しめそうです。

直ちに命にかかわることでない限り、患者に余計な不安を与えることを言わないのがベテランの臨床医です。「腎臓の機能は少し落ちていますが、年齢を考えるとこの程度だったら生活に支障ありません。心臓も大丈夫なので長生き出来ますよ」と言われると、患者はホッとします。高齢者の場合、本当の事をそのまま伝えられると益々不安をかき立てられることがあります。これから先何十年も生きる保証のない高齢者にとっては、緊急の治療を要する場合以外は、「特別なことはありませんから安心して下さい」と不安を取り除いてくれる医者が本当の名医です。

*特別連載寄稿「健康、心、薬」第十九弾に続く！！